

“再びフードディフェンスに注目！！”

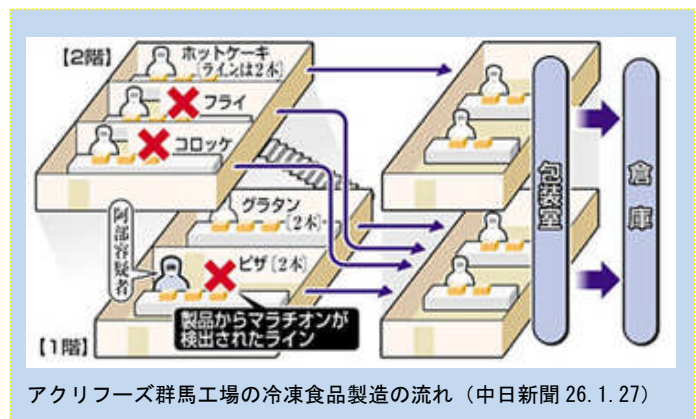


【筆者紹介】 大谷 丕古磨
大谷技術士事務所
技術士(農業・水産・総合技術監理)
食品関連コンサル協議会(FCC)理事
調理加工食品懇話会幹事

本通信のNo2でフードディフェンスを取り上げたが、この時は中国の天洋食品で冷凍餃子に農薬が混入され、原因を追及中であった。その後犯人が特定され意図的な犯罪と判明した。その数年後、今度は日本でまったく同類の事件が起こり、再びフードディフェンスの徹底が重要課題になった。国産なら安全という信頼感が失墜したのである。改めてフードディフェンスの面から、その原因と対策を見直してみたい。

＜今回の事件の概要＞

マルハニチロHDの子会社であるアクリフーズで生産した冷凍食品数種から農薬マラチオンの混入が発見された。調査の結果、従業員の一人が給与面の不満等から、香料瓶に入れたマラチオンを持ち込み、休憩時間に混入させたことが判明した。(状況は略図参照)



アクリフーズ群馬工場の冷凍食品製造の流れ (中日新聞 26.1.27)

《 フードディフェンスが何故役立たなかったか 》

中国餃子の事件以来、大手の食品工場ではフードディフェンスの体制を強化していた筈なのになぜこのような重大事故が起こってしまったか推測してみたい。

監視カメラは機能していたのか？

新聞やTVによれば監視カメラは設置されていたが、何を監視していたかに疑問を感じる。コスト対効果や抑止効果の点で監視カメラの使用は望ましいが、運用が効果的でなければ無用の長物になりかねない。

どこを監視しているかが重要！！

従業員や関係者の行動管理は十分であったのか？

報道によれば容疑者は休憩時間に自分の担当以外の職場にしばしば、立ち入りしていたとのことだが、論外である。従業員や関係者の行動管理が不十分であり、確りした規制と監視が望まれる。

従業員同志の相互連携や、組織による統制力が必要！！

全般的なフードディフェンスのムード作りには問題は無かったか？

当初の状況把握の不徹底、原因追及の過程にスピード感が欠けた点で、危機意識の希薄な社風が感じられる。

給与の不満対策だけでは解決しない問題で、実効のあるフードディフェンスの具体化と定着が課題であろう。

■編集後記・・・八重洲桜通りの桜が3分咲きになりました。(^^)/

編集責任者:高橋貞三 編集:梶川智子